

文化の風が吹くまちちくしの

# 文化薫道

## ◆其の五十一 龍頭と入舟

～古代と近世の水運と都市～

一曰市は、福岡平野と筑後平野をつなぐ平地が最も狭くなる位置にあるため、古くから交通路が集中し、そのことよって街が発展してきました。そこには陸路だけでなく、「水運」の重要性を示す地名が残っています。

一つは、「龍頭（たつがしら）」。

元々は国府の推定地などに見られ、運河のような人工水路、すなわち「水運」に関係する地名として注目されています。中国では科挙（官吏採用試験）の首席合格者を「龍頭」と呼んでいたことから、

国府の長官である国守にちなむ地名だと推測されています。

筑紫野市には、大宰府条坊（古代の都市区画）内に当たる、一曰市中央二丁目～三丁目に「龍頭」、塔原東四丁目に「田龍頭」の小字名が残っています。

「龍頭」は大宰府条坊の中央大路東側を流れる鷺田川の、「田龍頭」は五坊の南北路に並走する大溝の、上流に当たることは偶然ではないのかもしれませんが。

また、一曰市中央五丁目～六丁目の鷺田川と高尾川が合流する付近は「入舟」と呼ばれています。江戸時代の二曰市宿の北端にあたり、二曰市から博多の川端町まで、年貢米や生活物資が川船で運ばれていたことに由来すると考えられています。

人力や牛馬頼みの陸路と異なり、一度に大量の人や物を運べる水運の重要性は、現代の私たちが想像する以上に大きかったようです。そのことが、地名にも表れているのかもしれない。

問い合わせ先／文化財課

